同朋選書 28

悲しみに身を添わせて

祖父江文宏

目次●悲しみに身を添わせて

第一部　生きる

問質性肺炎を宣告されて　3
私は一人ではなかった　6
人間の考える正義とは　11
いのちの尊さとは　16
ゴキブリのいのち　19
虐待は人間喪失ではなく理知から起きる　25
親子の出会い　28
暁学園の誕生会　31

四億二千万のいのち　35
大宇宙に存在する地球　39
光と闇　43

第二部　私的「真宗」

現代を見る　51
浄土真宗について　53
「あなたの命は大切である」――日本公教育の差別性――　58
幸恵さんの場合　59
明美さんの場合　64
自己を問うということ　67
「祈り」一　里美さんのこと　71
「祈り」二　由紀子さん　75
見捨てられてきた児童養護施設のひとたち　85
なぜ傍観者でいられるか　90
人はなぜ福祉を必要とするか　91
国家福祉の限界「平等である」ということ　94
こころの充足　95
真宗仏教福祉　96
真宗仏教は、暴力を人間の根源的な問題としてきた　99
ＣＡＰＮＡの活動　100
家庭は暴力の密室　102
吾が子を殺してしまった母親の言葉　104
『観無量寿経』をどう読むか　107
王舎城の物語　親鸞聖人の目は、人間の理知と分別に向けられていた　108
「親鸞」　112

第一部

生きる

第三部 戯曲 アジャセ

王舎城の物語 121

戯曲「アジャセ」（四幕）演出ノート 121

アジャセ覚書 124

戯曲「アジャセ」（四幕）――理知と分別が生むもの―― 127

あとがき 220

間質性肺炎を宣告されて

おはようございます。酸素ボンベを持って車椅子という、なかなか仰々しい格好で現れましてすみません。いま、病名は〝間質性肺炎〟と言います。肺の細胞が死んでいくという病気です。発病したのは大体五年前。それで、どんな病気だろうと診断を受けたときに調べてみたら、どの本にも存命期間五年とあったんです。今年の桜を見るのが一つの山かなって思っておりました。ですから、このお話を伺ったときにお断りをしたんです。そうしたら中村先生から「生きていたら来てくれ」と言われました。どうも生きているのを死んだというごまかしはできませんのでやって参りました。

この病気になって、何が起きるかというと、現在もう自分の肺の力は二〇％以下

ですから、八五%ぐらいの肺が死んでいるのです。あと一五%ぐらいの肺で呼吸をしています。

こういう格好で酸素ボンベを持って、時々それでも僕の生活の場所である児童養護施設へ行きます。

児童福祉法第四一条に、「児童養護施設とは」という項目があります。「保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させて、これを養護し、あわせてその自立を支援することを目的とする施設とする」と書かれています。

その児童養護施設へ折々に出かけます。それで、この頃はこういう車椅子が必要になりましたので、とてもしんどいんですけれども、それでも施設に着けば小さい人が私を押してくれますし、それから、顔を見るなり、「園長すけ死んだらあかんよ」と声をかけてくれます。

それで、事務室の方に入って行くと、でっかい水槽がありまして、その中に金魚

が何匹かおります。小さい人が「園長すけ酸素吸っとるか」と聞きます。「吸ってるよ」と言うと、「うん」と言いながら、「酸素って何や」と聞くんです。そうすると大きい人が、その水槽の中のぶくぶく出ている泡を指差しながら「あれだ」と言う。それがどう間違ったのか、この間施設へ行ったら、どうも小さい人は僕が水槽の中に入ると思っているらしく、「まだ入らんのか」と言われました。

こうやって、若い皆さん方にお目にかかると、僕の知らないこともきっと知ってらっしゃるかもしれないと思います。僕に今の肺に替わる、そうですね、エラでも見つけていただいて、そのエラでも見つかったらお知らせください。そうすると、ひょっとすると来年もまた桜を見られるかもしれないと思っています。もうそろそろ、肺呼吸は終焉（しゅうえん）に近づいているかなと思っています。

私は一人ではなかった

こういう身体になって、僕は一つ気づいたというか、知らされたことがあります。先ほど学長さんの話にもありました、「自分」「私」という存在です。

私はドボンと水の中に飛び込んでね、窒息しそうになったことがありました。私は高校時代水泳の選手でしたので、よくプールで遊んだり泳いだりしていました。時々、高飛び込みの真似をしながら五メートルの上から飛び込んできて、そして水底に向かってぶくぶくと沈んでいきます、そして上を見上げますと水面にキラキラとお星様が光ってて、そのお星様をめざして一気に上っていく。その時に自分の肺の空気と、それから上っていくべき距離を計算しながら息を吐きながら上っていく。そんなふうにして上ってました。

そのことを思い出しました。というよりも、苦しくて仕方のないとき、これは本当に苦しいのです。内臓が全部ベキベキとはがされていくような苦しさです。その中で、もう死ぬんだと否応なしに思います。

そのとき、僕は一つのことを思いました。それはこれまで私は生きてきた。その生きてきた証というのは何処にあるんだろうかと思いました。そして、私は自分の六十二年間の人生を一つ一つ記憶をもとに、生きてきた道をもう一度確証してみよう、もう一度調べてみよう、あるいはもう一度手にとってみようと思いました。そのとき、基本に思っていたことは、私という人間はどう生きてきたんだろうかということでした。その私というのは何だったんだろうかということです。

初めは、私と切り離されて私という一つがあると、自己と他の一切の関係から断ち切って、己としての私というものを一生懸命に探そうとしました。しかし、どうもそれは違っていました。私が私という手ごたえのあるものとして受け取ったものは、様々なエピソードです。それは、ちょうど六十二年ですから、遥か昔からです。

セピア色に変わった写真といったらいいですか。その一枚一枚の写真の記憶というものがあります。それは、単純に私が生きてきた時代の時計の進行の方向に並んでいるんではなく、思い出すときには、悲しかったこと、あるいは嬉しかったこと、あるいは腹が立ったことというように、それぞれの感情で束ねられていたということです。だから、生きてきたという人生を、時計の進行時間の中で生きてきた人生というものを考えるのが当たり前だと思っていたことが、どうもこれは違っていたということがまず一つ気づいたことです。

それからもう一つ、すべてを切り離して己だとか私だとかして、自分を捉えようとしていたことも違っていた。エピソードとして浮かび上がってくる写真は、すべて感情で束ねられたものである。そして、その感情は必ず誰かと一緒だったんです。ですから、一人の写真は何処を見てもないんです。ということは、私はひょっとすると他の人、あるいは人というよりはもっと大きな、それが飼っていた犬であったり、あるいは感動を受けた花であったり、山であったり、風景であったり、そういう様々なもの、つまりそれを大きくいのちというような言い方をしたら、私はそのいのちの関わりの中の私でしかなかったということを思い知らされました。

どこをとっても、切り離した己というものはなかったのです。どの写真を見ても、私は私一人ではなかった。そして、いま、一週間前の検診では明らかに病状は進んでいるといいますから、残った一五%もやがて、まさに死んでいくということでしょう。もう時間を追ってはっきりとそれが見えています。そういう中で私はいま、こうしてここに来てあなた一人に出会うということができました。これは私にとっては、あなたに出会うことによって祖父江という人間がここに生きているという証が得られるということであります。私が私であるという確証は、あなたに出会ったということだろうといまは言えるように思います。一人で生きるということはないのです。人はいつもいのちとの関わりの中で私であるのです。そのことをつくづくといま思います。

そして、私の身体を気遣(きづか)ってくださる多くの仲間たちがいます。小さい人が、学

園へ行けば「園長すけ、死ぬなよ」と言ってくれますし、車の乗り場で、じっと私が来るのを待っていた人は、今年春、就職していった人ですが、中学時代はすごく荒れていた。そんな彼が、「園長すけ、俺のこと心配するなよ。俺大丈夫だからな。だから、長生きしろよ」と、わざわざそう言うために私をじっと風が吹いている中で待ち続けていてくれたのです。

そういう様々な人の思いの中、その様々な人たちに抱かれるようにして祖父江という人間はあったんだとつくづく思います。そして、今日あなた一人に出会うことが私であることの、最も素敵（すてき）な、あえて言えば、祖父江をもっとも祖父江らしく光輝かせてくれるそういう光なのだと思います。

人間の考える正義とは

私どもの学園には、様々な大人の暴力から傷ついた人たちがやって来ます。当然、その暴力から立ち直っていくために、彼らや彼女たちが真向かいにしなければならないことがいくつかあります。それは多分、いつだってどんなときだって赤ちゃんというのは自分の力で生きていけない存在であったのです。必ず先に生まれたものがその人を受け止めて、その人に一切の注文なしに「大丈夫だよ。生きていけるよ。怖がらなくていいよ」と語りかけることで新しく生まれてきたその赤ちゃんを抱きしめることでしょう。そこから人生がスタートするわけです。

つまり、赤ちゃんは生まれるべくして、いや抱かれるようにして生まれてくるわけでしょう。もしそうでないとしたら、つまり生まれてきた赤ちゃんが「あなたは

そのままでいいんだよ」と言われないで、「こうしなければならないんだよ」と言われたら、つまり注文されたら、その赤ちゃんは応えようがありません。それからさらにその赤ちゃんが、生きていく不安をいつも感じさせられるようだったら、その赤ちゃんは不安から、やがて生きていくことの、生きていけるかどうかという生存の不安にかられるでしょう。そして次には、いのちをおびやかされるかもしれないという恐怖を抱きましょう。恐怖を抱くと、人は暴力的になります。

このいまの時代、皆さん方がこの同朋大学においでになったということは、おそらく私はこの時代、周りを見てみれば、アフガンはもちろんイスラエル、中東あらゆるところで暴力が支配をしています。そして暴力を正当化していくような正義が、いま世界をとりまいています。このことは、ひょっとするとあなた方が、その暴力を正当化する論理で貫(つらぬ)こうとするのか、あるいはその暴力を正当化する正義ではなくて暴力すべてを否定することのできる地点に立って、その論理で世界を生きるのか、その選択をあなた方は迫られていると言ってよいでしょう。そういう時代だ

と思うのです。

そのときに、私たちが考えなければいけないのは、人が生まれてくるということは一切の注文を排してあなたであればいいのだよ、それが一番あなたらしい生き方なんだよ、そう語りかけてくるものに耳を傾けていくことしかないように思います。おそらく、それがこの同朋大学にあなた方がおいでになった意味だというふうに私は思います。

私たちは、自分を正当化するための暴力を正義と言ってきました。そして人間というものを考えるときに、私は私の亡くなったユダヤ人の友人を思い出します。ラスムンセンという名前の彼は、私より六つ年上でした。私がヨーロッパに留学していたときに私の世話をしてくれ、そして私にとってはかけがえのない親友となっていきました。その彼が、私がヨーロッパを去るときにデンマークのコペンハーゲンの空港で送ってくれたのですけれども、私は彼が一緒に生活している女性と一緒に送ってくれましたので、その二人に「はやく子どもができるといいね」と言いまし

た。そのとき、彼は僕の肩をすっと抱いて、柱の影に連れていってこう言いました。「俺はゲットウの中で断種手術を受けた」と彼は言いました。

このことは、後でまた彼に会ったとき、彼はこんな言い方をして教えてくれました。断種手術をされたとき、子どもだけのゲットウに母親や父親と別れて運ばれていくときに、麻疹(はしか)だった二つ下の妹は、運ばれていくトラックの中で死にます。そのとき、死んでしまった妹を母親は抱きながら「この子は立ったまま死んでしまった。立ったまま死んでしまった」とつぶやき続けた。それが父親母親と会う最後だった。その朝、子どもだけのゲットウに送られ、その中で断種手術を受けていくのです。「つらかったね」「痛かったんだろうね」と言ったときに、彼はこう言いました。「いや、でもね、医師も看護婦もみんな優しかったよ。ぼうや怖がらなくてもいいよ、そう言ってくれた。彼らはジェントルだったよ」と。

私たちは、断種手術をし生体実験を繰り重ねていく片側でジェントルである。私たちが見失っている論理はひょっとするとこの二つを併せ持つことによって成り立

っているのではないか。そういうふうに私は思います。

私たちが進歩し続けてきた、そして二十世紀を彩ってきた戦争といわれる大きな大きな殺戮、差別、虐待、その裏側には、いつもこのヒューマニズムがあったのではないか。だとしたら、あなた方が問わなければならないのは、そのヒューマニズムそのものだと思うのです。ヒューマニズムをよしとするのではなく、もっと大きなすべてのいのちが平等であるという視点を、あなた方は見つけ、そこに立つことしか時代を切り開くことはできないと思います。

そのためにというのはおかしいけれども、そのことがはっきり見える機会を持つということが、この同朋大学であなた方が学ばれる大きな意味を持つのだと思います。人はいのちというものと、それからそのいのちにエネルギーを得ながら、思い通りにならない現実の世界を生きていきます。

いのちの尊さとは

暁学園に来て大きな暴力を受けてきた人たちが、よくリストカットをやります。そして手首を切って血を流しながら、それをじっと見つめます。そしてやがては、そのリストカットを私に気づくように、見せるようにします。そんなことを繰り返してきた高校二年生の女の人が、思わずいつもと違って深く切ってしまいました。夜勤（やきん）の職員がびっくりして、救急車を呼び病院に送りました。彼女が帰ってきました。僕は知らせを受けて彼女の帰りを学園に行って待っていました。

夜中に彼女は帰ってきました。黙って彼女を寝かしつけて脇に座っていましたら、ふっと目を開けた彼女が私に「園長すけ、どっちが本当の私」と言いました。僕が聞き返すと、彼女は「園長すけ、私に死ねと言った私がいた。けど、リストカット

して今度は本当に死のうと思った。でも、そのときから死んじゃいけないという声がしていた。私その声聞いてた。どっちが本当の私」と私に聞きました。人はひょっとすると「死んじゃいけないよ、生き続けていけよ、大丈夫だよ生きていけるよ」と呼びかける声を心の奥底に持ちながら、それを聞きながら、思い通りにならない現実の世界を生きるのだろうと思う。そんなことをその人の言葉から教えてもらったように思います。

小学校の授業にいのちの大切さを学ぶ学習、単元（たんげん）というのがあります。この度に暁学園の人たち、小さい人は私に「ねぇ、私が生まれたとき、私はお父さんやお母さんみんなが私が生まれてくるのを楽しみにしていてくれてたの」と聞きます。暁学園にやってくる人たちは、乳児院から来たり、それから家庭の中から来る人もちろんいますけれども、多くは大人からの暴力を受け続けてきた人たちです。

その人たちが自分が生まれた、そして自分が大切な人間だ、自分のいのちは大切なんだ。そのことを学ぶために親が私をどう受け止めたか、周りの兄弟や祖父や祖

母や親戚の人たちが、私が生まれてくるのをどんなに待ち望み大切にしてくれたか。そのことを聞き取ってできれば写真、そして母子手帳、それを持ってきてクラスの中で発表し合うというものです。

それがいのちの尊さを学ぶ授業の単元の、授業の展開で行われることです。そして、それを私は毎年聞かされていくのです。その度に僕はひょっとすると人間がいのちというものを自分の頭の中で考えようとすると、いつもこういうことが起きるのだと思わざるを得ないのです。いのちが尊い確証を、周りの人たちがどういうふうに遇したかということで、もし知ろうとするんだったら、暁学園の人たちのいのちの尊さをどう説明したらいいんでしょう。レイプで生まれた人はどうしますか。人はいつも人に望まれて生まれてきますか。アウシュビッツを支配した論理、日本の戦争が支えた論理は殺していいいのちを作り上げたことでしょう。そして、いのちというものにはっきりと格差をつけて差別して、そしてとるにたりないいのちとしてそれを抹殺することを正義としてきたのでしょう。いま私たちの身の回りを見

ても、そんなことが起きてませんか。その人のいのちの尊さを、人のいのちの尊さを周りの条件で決めませんか。

ゴキブリのいのち

暁学園で、ゴキブリの卵を集めていた人がいました。ゴキブリの卵はご存知ですか、お米ぐらいの大きさで、見てみると横に筋が入っているのです。あめ色をしています。ちょうどお米を煎ったみたいな色をしているのです。それが冷蔵庫の裏なんかに、冬はびっしり付きます。それを集めて、そして薬の入っている薬品庫からカット綿を持っていって、そしてその上にその卵を一つずつ並べていました。そのことを知っていたのは僕だけです。

その人は、たっくんというのですけど、たくや君は学校から帰ってくると、僕に

「園長すけ、見せてやるよ」と言って小声で呼んで彼の部屋に案内してくれます。周りを見ながら、誰もいないと彼は自分のロッカーの引出しを開けます。他の人たちはそのロッカーにパンツだとか靴下だとかシャツだとか入れてるのですけれども、彼のロッカーには網がはってあります。この網はよく見ると、その部屋の廊下の向こうにある網戸に同じ形の切り傷がありますから、当然そこから切り取ったものなのです。それを、引出しの上に張って、そして箱の中には包装紙がひかれ、そこに一つひとつベッドのようにカット綿が置かれ、その上に卵が一つずつ置かれていました。

やがて、卵が孵(かえ)りました。小さなゴキブリの子どもがうじゃうじゃと動きはじめました。やがてそれが大きくなってきました。たっくんは僕に「なぁ、園長すけ。よぉく見てみろ。全部これ顔が違うぞ」と言いました。皆さんにゴキブリの顔の違いがわかりますか。僕はわかりませんでした。やがてしかし、ゴキブリがだんだんに大きくなってくる。その頃やはり、たっくんが最も気をつけたのは周りの職員に

見つからないことです。ことに、当時いた松下という保母さんは、これは天才的にゴキブリが好きというよりは、ゴキブリを見ると反射的にスリッパを脱いで投げつけるのです。しかもコントロールがすごくいいのです。百発百中で、ぺちゃんこにするという特技を持っていました。この松下保母の目を彼は避けながら、ゴキブリを飼い続けました。

上から見ていると、やがて一匹だけは明らかに違って大きな、そして他はまだあめ色だった頃に黒々としたゴキブリが走り回っていました。彼はそれをゴキタと名づけました。このゴキタだけは、僕にもわかりました。大きさだけじゃなくって、上から見ると触覚が、片一方、上から見た右側の触覚(しょっかく)が直角に曲がっているのです。ですから、すぐにわかりました。そのゴキタを指差しながら「なぁ、園長すけ。なめたみたいにピカピカだろ」と言いました。本当にピカピカでした。他のゴキブリたちも、やがて色が出てきて茶色から黒に変わっていく。しかし、一匹だけちっちゃい、そして色がなかなか変わらなかったのがいました。たっくんに僕が「なぁ、